

校長会広報

No.857 令和6年7月16日
発行 岐阜県小中学校長会
岐阜市菅原町3丁目3番地
TEL (058) 265-0338
FAX (058) 263-8892
代表者 梅村高志
印刷 (株)杉江美術印刷

令和6年度

岐阜県小中学校長会研修総会

令和6年6月11日

令和6年度 岐阜県小中学校長研修総会は、アンケート結果に基づき、オンラインでの開催とした。

梅村高志会長は挨拶で、昨年度末退職及び満60歳を迎えられた89名の校長先生への感謝の言葉を述べ、新たに校長会に仲間入りされた78名の新任校長へ激励を送った。



続いて、511名の会員に向け、目の前のかけがえのない子供たちが、やがて立派な社会の創り手となるよう、以下の2点について所感を語った。

1 見極める「不易」と「流行」

松尾芭蕉が説いたとされる「不易」と「流行」という言葉がある。教育における両者は決して対立概念ではなく、変化に即した流行を追求する中で、ぶれてはならない不易というものが一層明確になる。この考えのもと新時代のスタートラインに立つことの重要性を感じている。ある識者によれば「30年後、学校は存続するものの、教科指導では、人間よりも卓越したAI教材が教授スキルに優れ、成果は上がるだろう」という辛辣な見立てがある。一方で「将来、教師の役割は不要となる」といった論調を未だ耳にしない。そこには「人間教育」への揺るぎない期待があり、教育が持続的に果たすべく使命と責任が連綿と続くものと確信する。「変化に富む時代を生き抜く心豊かでたくましい子供を育む」という普遍の目標に対して、真正面から挑むことができるのは、我々人間・教師に他ならない。

2 役割と使命

岐阜県校長会では、研究や教育実践に関する実務については、小学校長会・中学校長会が担っている。一方、小中校長会の役割は義務教育の代表として、行政や関係諸機関に「学校の声」をまっすぐ届けること、義務教育への理解者を増やすことだと考えている。教育の一層の充実、強化という願いに立ち、連携を強固にしながら進める。今年度は86に及ぶ諸

会議の委員を校長先生方をお願いしている。各専門委員会の活動と併せ、子供たちそして校長自身にとって有益な協議の場となることを切に願う。

結びに、これまで先輩が紡いでこられた教育に対する情熱と使命感をしっかりと受け継ぎ、いかなる時代が訪れようとも、私たち校長が一丸となって教育と真摯に向き合うことを「岐阜県小中学校長会」の総意として本日ここに決意する。

【県教育行政講話】

岐阜県教育委員会の青木孝憲義務教育総括監による講話を拝聴した。教職員に対し一人の人間として尊重し、温かいまなざしで寄り添う校長であってほしい、子供たちの笑顔をつくってほしいという願いを語られた。その上で以下の行政説明があった。



◆「変形労働時間制」

- 本制度を活用するための条件等
- 6点の措置
- 「年次休暇習得期間」の変更

◆特別支援学級在籍児童生徒数、学級数の推移

- 視覚障がい児童生徒支援充実事業
- 通級指導教室児童生徒数、教室数の推移
- 岐阜県高等学校における通級指導

◆GIGA環境

- 第1期から第2期へ
- 全国学力学習状況調査
- 端末活用が前提

◆児童生徒を性暴力等から守るための法改正や社会認識の変化

◆61歳以降の勤務選択

- 61歳に達した教職員の諸手当
- 年齢や持ち味を発揮して

※青木義務教育総括監の講話概要は小中校長会HPに掲載されています (<http://kochokai.com/>)

(加納西小 馬淵 勝弘)

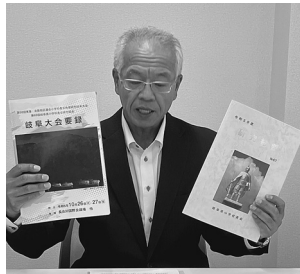
小学校長会研修総会

(Web配信)

岩見浩二会長は、岐阜県小学校長会の意義について、次のように語った。

■組織的にリーダーシップを磨く

岐阜県小学校長会の会則第3条には、本会の目的として、教育の振興発展、教育行政に関わる諸般の連結提携を図る、とある。この目的の実現には、校長一人一人の資質向上が欠かせない。校長の仕事は、学校経営、人材育成、外部連携の3点に尽きる。これらの力を高めるために、「組織的にリーダーシップを磨く」ことを大切にしたい。リーダーシップには、管理する力と感化する力の両面が重要であると言われる。昨年度の研究大会の研究要録と研究紀要は、校長がいかにリーダーシップを発揮したかを明確に記述することを意図した。これらの資料を参考に、組織の成果を自校の学校経営に生かしていただきたい。



■先送りできない問題・持続可能な組織

学校は、まさに、予測困難で、先行きが不透明な状況の渦中にある。毎日の学校経営に危機管理の知見が必須で、管理職として、正しく事実・情報を把握し、迅速な決断を求められる場面が相次ぐ。校長が確かなリーダーシップ、管理する力と感化する力を発揮し、先送りできない問題や、持続可能な学校づくりに、校長会という組織で向き合っていきたい。

■研究実践の意義

組織的にリーダーシップを磨くための大切な機会が、県小学校長会が推進する研究実践である。今年度から、分科会の所属郡市を新たに組み替え、新しい研究サイクルに入る。今年度も会員の英知と情熱を結集し、組織的にリーダーシップを磨き、安全・安心で、信頼される学校づくりを推進していきたい。

最後に、第59回 東海・北陸地区連合小学校長会教育研究 愛知大会において提案する第2分科会「組織・運営」(加茂郡)、第7分科会「研究・研修」(安八郡)の具体的な実践を聞き、研修を深めた。

(城西小 石樽 千恵)

中学校長会研修総会

(Web配信)



佐藤幹彦会長は、本年度のテーマである「子供たちや教職員の『将来の幸せ』を真に願って連携・協働する中学校長会」について語った。

■朝、本校で

毎朝、職員玄関や廊下等が美しく整えられている。校務員さんは「朝から美しく整えるのは当たり前」と話す。学校の教育活動を支えている全ての教職員に感謝している。

■真の目的は

県教委の「教職員の働き方改革プラン」では、学校現場と教育委員会が一体となって、教職員の働き方改革を進めることが述べられている。「子供たち一人一人としっかり向き合う」ことが「働き方改革プラン」の真の目的である。

■「幸せ」を真に願う

「元気に登校 笑顔で下校」。学校経営の柱として使っている合言葉である。対象は子供たちだけではなく教職員も含めている。子供たちや教職員が心身ともに健康で、いつも「元気・笑顔」でいてほしいと真に願っている。そして、それぞれの居場所で、「楽しさ、やりがい」や「できた、わかった、やり遂げた」といった満足感や達成感を感じながら、自分なりの「幸せ」を見出してほしいと願っている。

■さらなる連携・協働を

予測困難な激動の社会である。だからこそ、中学校長会は、これまでの創意工夫ある研究推進と、進路指導や生徒指導に係る各種関係機関との良好な関係等、脈々と継承してきた財産を大切にしながら、子供たちや教職員一人一人の「将来の幸せ」を真に願って、各地区・各中学校間の連携・協働を大切にしていきたい。そして、どんな状況の中にあっても、お互いにくじけず前を向いて進んでいく中学校長会としていきたい。

その後、本年度の活動方針と重点、研究推進、岐阜地区大会、中体連事業、進路指導、生徒指導に加えて、令和7年度東海北陸岐阜大会に向けての提案を行った。校長にとって資質向上を図るとともに、学校経営の改善に資する研修となった。

(青山中 平塚 剛)

岐阜県の子供たちの充実した生活を願って

1 岐阜県の子供たちのためにできること

私たち岐阜県小中校長会では、『夏の友』、『冬の友』、『夏の生活』などの出版事業に関わって大切にしていることが4つあります。

- ①「長期休業中に、子供に付けたい力を考え、自分自身で生活を充実できるガイドブック」
- ②「県内のどの地域、どの規模の学校でも、同じよい指導ができることを願って」
- ③「県内のすべての児童生徒に、良質で安価な読み物を届けたい」
- ④「知恵を絞って、自分たちで作った出版物充実した読書、郷土、家庭、宝物、学習の領域」

毎年、編集に取り組み、版を重ね、児童生徒の発達に即したよりよい出版物が作られています。

2 子供たちの充実した長期休みを願って

○『夏の友』、『冬の友』（小学生向け）

例えば、『夏の友』では、長期休みの目標、家庭での仕事、健康な生活、運動、読書のすすめ、読み物、ふるさと教材、家族、地域、体験コーナー、料理、実験、作品づくり、学習領域、振り返りなど多様な領域となっています。単なる学習テキストでは代用できない、他に例を見ない豊かな内容の出版物であり、児童のことを真剣に考えた編集委員の先生方の英知の結晶です。

約40日間の長期の夏休み、家族と過ごすことが多い冬休みに、『夏の友』・『冬の友』を、長期休みのガイドブックとすることで、自分で生活を充実させることができます。

○『夏の生活』（中学生向け）

『夏の生活』は、令和4年度に大幅なりニューアルを図りました。夏休みに生徒の自主的、自発的に取り組む力が育つことや、長期休業を有意義に過ごすことができるよう、付けたい力につながる改訂を行いました。編集委員を倍増し、郷土を知ろう、宝

出版事業委員会委員長 加藤 浩 幸物を作ろう、学力をつけよう、可能性を広げよう、など4つの領域の充実を図りました。

特に、学習領域の大幅改訂を進め、基礎基本問題に加え、本年度は発展問題も加えました。また、繰り返し自主学習ができるよう基礎を固める方法のガイドページを改訂し、自己チェックや再チャレンジできるようにチェック欄（□□□）を設けるなど、付けたい力に導く工夫がなされています。

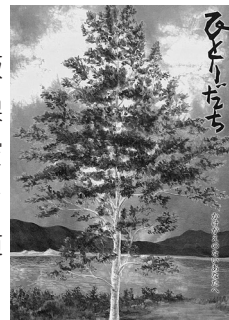
『夏の友』、『冬の友』、『夏の生活』いずれも、豊かな郷土の自然や文化、そこに暮らす人々の思いにふれることができるよう編集をしており、岐阜県が推進する「ふるさと教育」についても学ぶことができる、唯一無二の良質な出版物です。

3 子供たちの充実した生活を願って

また、次の出版物の編集を実施しています。

○『ひとりだち』

本年度は新しく第13版を出版します。中学生たちが自らの課題を自主的に解決し、ひとりだちしていくことを願って編集された読み物です。子供たちの道しるべとしてご活用ください。



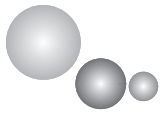
○『基本 日本語の表記』

用字用語の表記を、豊富な用例と併せて示した実用辞書の決定版です。

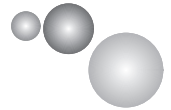
○『ふるさと散歩』

岐阜県の豊かな自然、文化、芸能を伝える施設を県内地区ごとに分けて題材を選び紹介します。

今後も「良質で安価な読み物を岐阜県の子供たちに届ける」という校長会の「志」を大切に、出版物の編集に努めてまいりますので、校長先生方のご理解とご協力をお願いいたします。



地域と共に子供を育てる



1 はじめに

県は第4次岐阜県教育振興基本計画の中で「多様な人とのつながり、関わる力を育む教育」を重要施策の一つとしてあげています。

本校では、こうした方針や学校の教育目標「豊かな心でたくましく生きぬ子を育てる」を具現するため、学校運営協議会と公民館が連携し特色ある活動を進めています。また、総合的な学習の時間では、地域の方の支援を受けながら中有知小ならではの体験を各学年で行っています。この機会に本校の学校運営協議会の活動や総合的な学習の時間の実践について紹介していきます。

2 学校運営協議会

【基本姿勢】

- 中有知の子は、中有知の地域で育てる。
- 学校を核にして地域に住む私たち全員が子育ての「当事者意識」もつ。

学校運営協議会ではこの2つの考え方を確認した上で、3部会からなる組織（安全防災部、学び部、地域行事部）を作り、願う姿を4つ決めました。

- ①場に合ったふさわしい「あいさつができる子」
- ②自分の命（安全）は「自分で守ることができる子」
- ③地域の方との「ふれあいから学ぶ子」
- ④「思いやりの心をもつ子」

<安全防災部>

学校運営協議委員、中有知地区青少年を守る会、関係団体（警察署、少年警察ボランティア）が連携し、タウンミーティングを実施しました。

「SNSを通じて犯罪被害から子供を守る」を目的として、6年生を対象にSNSの犯罪に自分が巻き込まれることがないように地域の大人と一緒に、その付き合い方を考えました。



美濃市立中有知小学校長 石原 隆

<学び部>

祖父母の方から、「孫にどのように関わったらよいか分からない」という声があり、専門家を招いて『孫育て講座』を開催しました。学校は祖父母参観日として働きかけを行いました。

<地域行事部>

「地域の人と共に働き、触れ合う中で、地域とのつながりをもてるようにしたい。」という願いのもと、公民館と連携し、公民館が行事に積極的に参加できるよう働きかけを行っています。

○中有知地域文化祭へのボランティア参加

○夏休み行事への参加

子供学習会、鮎つかみ、子供社会見学

※子供学習会は地域の方が先生となって勉強を教えます。

3 地域の方に支えられた体験学習

本校では、地域の方々の積極的な支援を受けながら農業体験や地域学習、障がい者の方との交流を行っています。

1年生：とうもろこしの収穫

2年生：じゃがいもの収穫

3年生：大根の収穫・販売、地域の山の登山

4年生：鮎の放流

5年生：米づくり

6年生：聾者の劇団との交流



4 おわりに

6年生の児童が国語の時間にインタビューに来ました。中有知小学校のよさを紹介するためとのことです。「中有知小学校がこれだけ地域の方と触れ合うようになったのはなぜですか？」こんな問いを投げかけられました。学校のよさとして、地域の方との活動を認識している児童にうれしくなり、精一杯答えさせてもらいました。

「明日もまた来たい学校」へのリ・デザイン

岐阜市教育長 水川和彦



東海地方初となる学びの多様化学校（旧不登校特例校）「草潤中学校」が本市に開校して4年目となりました。様々な理由で不登校となった児童生徒が、再度期待を寄せて通うこの学び舎では、この3年間、一貫して8割近い生徒が登校を続けています。不安を抱え入学した生徒が、自分らし

さを取り戻し学ぶこの学校も、開校当時は生徒在校中の視察受け入れさえ不可能でしたが、現在は、200名近く集まる入学説明会で堂々と自分の思いを話したり、来訪者に学校案内を希望したりする生徒が現れるまでになりました。ひとえに、草潤中学校の教職員の情熱と努力の賜物だと思っています。

さて、この学校に一貫して流れる「ありのままの君を受け入れる新たな形」という教育方針は、3つの柱を基軸としています。1つ目は、「安心できる居場所」、2つ目は信頼できる大人の存在、3つ目が『選択と行動』のプログラムです。

1 安心できる居場所

草潤中学校では、生徒にあらかじめ指定された学びの教室や生活のエリアはありません。朝のウォームアップの活動後は、自分が一番安心できる場所を居場所とします。教室はもとより、図書室、保健室、ギフトドールームなど、一番過ごしたい場所、学びたい教室が自分の居場所となります。

2 信頼できる大人の存在

自分が安心できる居場所では、ありのままの自分を受け入れてくれる「信頼できる大人」としての先生がじっくりと向き合います。生徒の悩みや願いに「解答」を示すのではなく、「一緒に答えを探しに行く」伴走者として、とことん付き合うのがこの学校のスタイルです。

3 「選択と行動」のプログラム

草潤中学校の日常を支える最大の特徴は、「活動内容を自分で決めて、自ら行動する」しくみにあります。登校時刻、学習の時間割、教室・オンラインを含めた学ぶ方法、セルフデザインや総合的な学習の時間等の自己探究の内容、さらには、日々の生活のパートナーとなる担任の先生に至るまで自分で決

めることができます。校則もありません。

入学式と卒業式以外に定例行事や活動もなく、生徒がやってみたい活動が出てくると、仲間を募りプロジェクトを組み、希望者で実現させていきます。願いや思いを共有できる仲間とともに協力し合う中で、不安だった思いは仲間と創りだす喜びへと変化していきます。

ここまで書くと、他の中学校との違いがおのずと明確になってきます。「ゆるぎない伝統の教育カリキュラムに子供が合わせて学ぶ」日本の公教育とは異なる「生徒が決める」スタイルを草潤中学校は貫いているのです。

文科省への申請・認定を経て、特別な教育課程を編成・実施する学校であることに加え、不登校で一度はしぼんだ生徒のエネルギーが再び満ちていく過程に、「安心できる居場所」、「信頼できる大人」、そして「選択と行動」のプログラムがあることは、やはり大きな強みであると思えてなりません。

昨今、全国の不登校児童生徒は30万人にも到達しそうな勢いで、増加の一途をたどっています。

不登校対策が学校教育の重要課題の一つであるといわれている今、岐阜市では、このプログラムを草潤中学校だけにとどめず、全小中学校への水平展開を始めました。スクールカウンセラーやほほえみ相談員に加え、市費による全小中学校への子供の安心を支えるいじめ対策監配置、中学校での校内フリースペースの設置と専属教職員の配置、心と体の健康アプリ「ここタン」を用いた子供が抱える悩みの即時対応と教職員共有のシステム、さらには、メタバースを活用した学びの教室「みちる一む」の展開等、欠席日数の多少によらず、不登校のあらゆる態様を幅広く支える仕組みをつくり全方位展開を目指しています。

一つのエビデンスを最後に示します。県平均より高い不登校児童生徒の出現率が続き、小中学校とも毎年100名を超える増加をみせてきた本市ですが、昨年度の不登校児童生徒は、対前年度実績で、小学校で100名超の減少、小中学校全体の合計でもわずか1名の増加にとどまりました。草潤中学校を立ち上げ、全市にそのしなやかな仕組みを水平展開する中で、「明日もまた来たい学校」づくりの根幹となる、大切なヒントが見つかったと私は思っています。

東西南北

『元気が生まれる学校』をめざして

多治見市立養正小学校長 高橋 光弘

本校は、令和4年度に創立150周年を迎えた学校です。多くの保護者や地域の方々には伝統ある学校に誇りを持ち、学校に大変協力的な校区です。

こうした保護者や地域の期待を踏まえ、目指す学校像を『元気が生まれる学校』と設定して日々取り組んでいます。そのために、自己有用感を育み、挑戦意欲を高めることに重点を置いて教育活動を展開しています。特色ある活動を3つ紹介します。

1つ目は、1年生から6年生までの縦割りグループの活動です。6年生は全員がリーダーとして清掃活動を取り組みます。掃除道具の使い方など丁寧に教える姿がたくさん見られます。また、児童会行事としてこの掃除グループによる『なかよし養正あそび』を行っています。下級生が楽しめる遊びやルールを工夫して楽しく活動しています。

こうした活動を通して、下級生は自分のことを大切に思ってくれる上級生がいることを実感します。また、6年生は、自分は下級生の役に立っていることを実感します。

地域の一員として

垂井町立北中学校長 山田 直人

本校は垂井町の北部に位置し、校区には2つの小学校があります。

平成29年度に垂井町教育委員会の指定を受け、北部小中3校が連携して、「コミュニティ・スクール」の立ち上げを検討し、平成30年度から「コミュニティ・スクール」として歩み始めました。

校区は2つの地区からなり、それぞれにまちづくり協議会がおかれ、連携を図りながら地域の皆様から様々な支援をいただいています。さらに、地域の皆様に学校の教育活動に参加していただく機会や、アイデアや知恵を出していただく機会を多くもつことができるようになってきています。

昨年度より「地域の一員としての責任を自覚し、活動に取り組む」ことに力を入れ始めたところ、まちづくり協議会からは様々な活動を提案いただき、生徒の成長を支援していただきました。ここに、取組の一部を紹介します。

2つ目は、6年生による鼓笛演奏です。本校では、鼓笛演奏を伝統的な活動として40年以上繋いできました。秋の運動会や11月の「多治見まつり」のパレードで披露しています。卒業生や保護者だけでなく多くの地域の方々を楽しみにしている活動です。6年生は多くの方々の応援を受けながら「自分たちの演奏を楽しみにしている人がいる、地域の方々の役に立っている。」ことを実感することで自信を高めています。パレードを終えた6年生は、総合的な学習の時間で12月ごろから5年生に演奏技能と伝統をつなぐ気持ちを引き継ぎます。

3つ目は、地域と共に取り組む花いっぱい運動です。まちづくり市民会議の方々と連携して、美化委員会やボランティアの児童が取り組んでいます。具体的には、花の植え替え、植え替え、プレート作成などの活動です。7月には、育てた花を『子ども110番』の家の方に感謝の気持ちを添えてプレゼントしています。地域の方々からの感謝の言葉を耳にして、人の役に立つ喜びを実感しています。これからも自己有用感を育み、「よしやってみよう！」という元気な挑戦意欲を生み出していきたいと考えています。

○府中地区まちづくり協議会

中学生地区リーダーに地区の避難所設営訓練への参加を呼びかけていただき、災害時に中学生ができることや期待する役割について学ぶ機会を作っていただきました。地域の一員として、災害時にできることを考えるきっかけとなっています。



○岩手地区まちづくり協議会

本地区はホテルが自生する自然豊かな地区です。この豊かな自然を保全するために、地域の方々と共にアイデアを出し合いながら保全のための活動を立ち上げていく取組を行っています。



このように、地域の皆様に期待され、支えられながら、地域の一員としての役割を考える機会をいただいています。

「学び・育て・動く」として語り合う

美濃加茂市小中学校校長会

1 はじめに

美濃加茂市小中学校校長会は、小学校9校、中学校3校の12校、12名の校長で構成されています。美濃加茂市は平成の大合併で他の自治体と合併することもなく、また、先ごろ発表された人口戦略会議の報告では県内で唯一「自立持続可能性自治体」に位置付けられたように、少子化の影響も少なく、1975年の山手小学校の開校を最後に、この50年間に公立小中学校の新設や統廃合はありません。

50年間変わることなく校長会は12名で構成されてきました（と思われる）。変わることなく続く。それ故、美濃加茂市小中学校校長会の結束は強固であると自負しています。

2 方針

○学校や地域社会をとりまく状況や課題を的確にとらえ、よりよい方策を互いに学び合い、教職員の指導力を鍛え、校長としての学校経営力（指導性）を高める。

○関係諸機関と連携して、教育環境の整備・充実をはかるための提言・要望活動を積極的に行う。

3 重点と研修方法

<学び> 確かな学力と人間関係能力の育成、危機管理に強い学校経営を推進する。

- ・現場主義の研修を重視し、年間4校による学校開放を実施する。

- ・外部講師を積極的に招き、研修の場とする。

→「先輩のあの人に聴く」

<育て> 働き方改革を推し進めるとともに、教職員の資質向上・人材育成を図る

- ・校長会として、美濃加茂市内の教頭会や教務主任会等への指導について、担当校長を中心として積極的に行う。また、自主研修（管理職選考試験）や講師研修（教員採用試験）等の組織的・計画的な指導に取り組む。

<動く> 組織的・直接的な提言・要望活動を継続、推進する。

- ・学校経営の工夫改善のための要望・提言をまとめ、要望先を明確にし、継続的に働きかけを行う。働き方改革を進め、教職員の時間外勤務や多忙感の軽減に努める。

<語り合う> 積極的に意思の疎通を図り、吸収しあう。そして校長としての力量を高める

- ・校長も一人職。せめて校長会を通じて、語り合い、時に言いたいことも言い、弱音も・・・校長会が一枚岩であってこそ、それぞれの学校という砦を守り抜くことができる。自分の考えや悩みだけでなく、アイデアや試みなど、どんどん出し合って語り合うことができれば、「校長会に来てよかった。元気がもたらされた」と思えるはず。言葉に記すのは簡単だが、そんな校長会になることを願っている。



「教室の景色」のゆくえ

瑞穂市立南小学校長 曾我部 雄 志

コロナ禍を経て、「教室の景色」は大きく変わった。新型コロナ対策期間中、感染防止のため、テストを受けるときのように、机と机の間隔を空けた座席配置が教室の主流となった。

この「テスト隊形」が、新型コロナ5類移行後1年を過ぎた今も、県内の相当数の学校で続いている。こう書いたが、統計を取ったわけではないので、あくまでも自分の印象である。

コロナ対策として「テスト隊形」を採用した根拠は、文部科学省の衛生管理マニュアルの「座席配置の一例」にある。この「座席配置図」は、最新のマニュアルからは削除されている。つまり、感染対策の一例としては示されていない。

となると、疑問がわいてくる。なぜ国のマニュアルから消えた「テスト隊形」を、5類移行後も続けているのか。

4月に、愛知県の教員と話をする機会があった。

教室の座席配置について尋ねると、「ああ、本市では令和5年の5月8日以降、どの学校もコロナの前の座席に戻っていますよ。」「机と机の間隔も空けていません。グループ隊形でも学んでいます。」との返事だった。地域が変われば、違うものである。

学習指導要領の中核は、「主体的・対話的で深い学び」である。この中の「対話的な学び」において最も重要なのは、子供同士の距離の近さである。子供同士が寄り添うようにして学び合う。これが「対話的な学び」の前提となる。

「教室の景色」は、コロナ前に戻るのだろうか。それとも、戻らないのだろうか。あるいは、コの字型の座席配置やグループ隊形といった、子供同士の対話を保障する隊形が主流となり、子供たちがまなざしを交わしながら学び合う景色へと移っていくのだろうか。

校長講話 シリーズ

教師も保護者も地域も児童を・・・

高山市立東小学校長 土師 功嗣

運動会のスローガンは？
 「みんなで盛り上げる最高の運動会」
 "みんな"って誰のこと？
 そう、1年生から6年生のみんなですね。そして、目の前にいる先生たち。それから、運動会を見に来てくださったお父さんやお母さん、家族のみんな。そして、地域のみなさんのこと。
 では、"盛り上げる"ってどうすること？
 そう！応援です。大きな声で「がんばれ！」「走れ～！」って叫ぶこと。それから？競技や演技が終わったら「がんばったね」「速かったよ」と認め合い、褒め合うこと。先生たちも、お父さんやお母さん家族のみんなも地域のみなさんも大きな声で「がんばれ！」と応援すること。「精一杯やったね」「かっこよかったよ」と褒めること。
 ここにいる1年生から6年生のみんなと先生たち、お父さんお母さん家族のみんな、地域のみなさんが大きな声を出してがんばるみんなを応援することで最高の運動会ができるのですね。

子供たち同士はもちろん、教師・保護者・地域が、同じ視点で子供たちに声を掛け、素敵な姿を認め、褒める。これが今、学校に求められているものだと考えています。

今日は、「一つ」になって、どうか"みんな"で盛り上げる最高の運動会を創り上げましょう。

【講話のねらい】一堂に会し、子供たちの頑張る姿、輝く姿に注目し、様々な感動を共有できるのが運動会。児童を中心に「一つ」になることの意味付けをしたいと考え朝礼台の上から話しました。

電車の中での心の準備

海津市立城南中学校長 宇野 聡

本校は、県内でも珍しい電車通学の生徒がたくさんいる学校です。全校生徒の約63%が電車通勤をしています。

ですので、城南生の皆さんには、電車を利用している他の方々の迷惑にならないよう、特に2つのマナーを守ってほしいと思っています。1つ目は、降りる人が優先で乗車すること。2つ目は、電車の中では小さな声で会話することです。

さらに、お年寄りや妊婦さんが乗車してきた時は、元気な君たちが進んで席を譲ってほしいです。通学時だけでなく、普段、電車に乗るときも、このことを心に留めておいてほしい。なかなかこうした場面はないのかもしれませんが、そんな場面に遭遇する時に備えて、ぜひ、席を譲ってあげようという心の準備をしてほしいと思います。

昨年、卒業した3年生が、修学旅行で東京の地下鉄を利用したときのことです。小さな男の子を連れた親子に席を譲っている生徒がいました。私は、彼の姿があまりにも自然で大変びっくりしたことを覚えています。おそらく、普段からこのような心の準備できていたからでしょう。

この電車の乗り方のように、城南生として、普段から弱い立場の方々に優しい行動をとることができる心の準備ができているとよいですね。

【講話のねらい】電車通学の様子を例にとり、普段から、立場の弱い方々に優しい行動をとることができる中学生であってほしいという、願いを込めました。

事務局だより

◆会議案内（8・9月分）

	月日	曜	時刻	会 議 名
小中校長会	8. 23	金	11:30	退職校長会との懇談会
	9. 6	金	9:10	役員会①
		水	10:00	詩と作文コンクール審査
	25	水	14:00	市町村教委連合会懇談会
小学校長会	8. 21	水	9:30	役員会⑦
	9. 5	木	10:00	理事会②
		火	10:00	分科会委員長会③
		水	9:30	臨時役員会
中学校長会	9. 4	水	10:00	企画委員会⑤

編集後記

先日、突然教え子から学校に電話がかかってきました。学校だよりの回覧を見て、驚いて電話をしてきたそうです。「先生、みんな誘うから飲みに行こうよ！」という誘いから、15年ぶりに彼らと会うことになりました。30歳の彼らはみな中学の時と同じ顔をして「あの時、先生、顔真っ赤にして怒ったでなあ。」「卒業式の時、先生大泣きやったもん。私もずっと泣いとったけど・・・。忘れられんわ・・・。」等、当時のことを一晩中話していました。そんな彼らの顔を見ながら、校長として今の学校の子供たちが何時間も話すだけの感動を与えることができているのか。各担任は子供たちが年をとってもずっと話し続けることができる学級づくりをしているのか。なんとなく考えていました。結婚や再就職で悩む彼らの言葉から、今の自分の仕事ぶりについて考えさせられた一晩でした。(M)